

当院では 2022 年より液状化細胞診（LBC 法: Liquid-Based Cytology）を採用致しました。従来の「直接塗抹法」では採取した細胞を直接スライドガラスに塗抹する為、細胞の乾燥リスクや血液・粘液等の不純物が付着し診断に影響があるとされてきました。

「液状化細胞診」では専用の保存液が入ったバイアルと呼ばれる容器の中でブラシをすすいで細胞を回収し、その保存液から専用の機械にかけ細胞診検査用標本を作ります。その為液状化細胞診では血液や粘液などの不純物を取り除いた上で標本を作る事が可能となります。また細胞の乾燥を防ぐとともに細胞の重なりが少ない標本を作れる為、病変の検出率向上が期待されます。

#### 従来の直接塗抹法



#### 液状化細胞診（LBC 法）



## 子宮頸がんとは

### 子宮頸がんとは

HPV(ヒトパピローマウイルス)というウイルスが主な原因で、誰もがかかる可能性のある病気です。治療する薬はまだありませんが、**早く発見すれば子宮を残すことができ、妊娠・出産も望めます。**

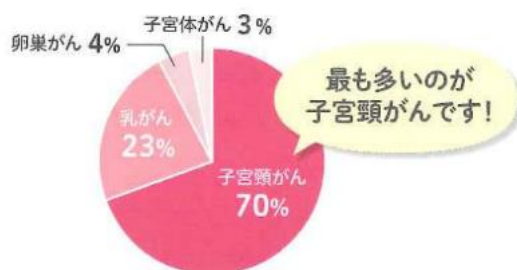
### HPVに感染すると

ほとんどの場合は免疫力によって自然に消えますが、感染している状態が長く続くと、一部は細胞が変化を起こし、子宮頸がんへと進行します。

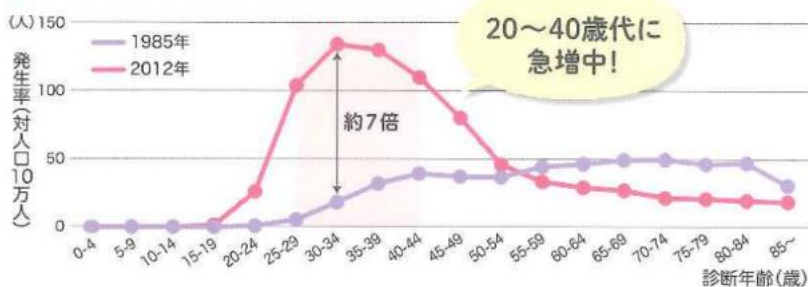
### HPV検査とは

HPVに感染しているかを調べる検査です。

■ 女性特有のがん患者の比率(20・30歳代/2010年)

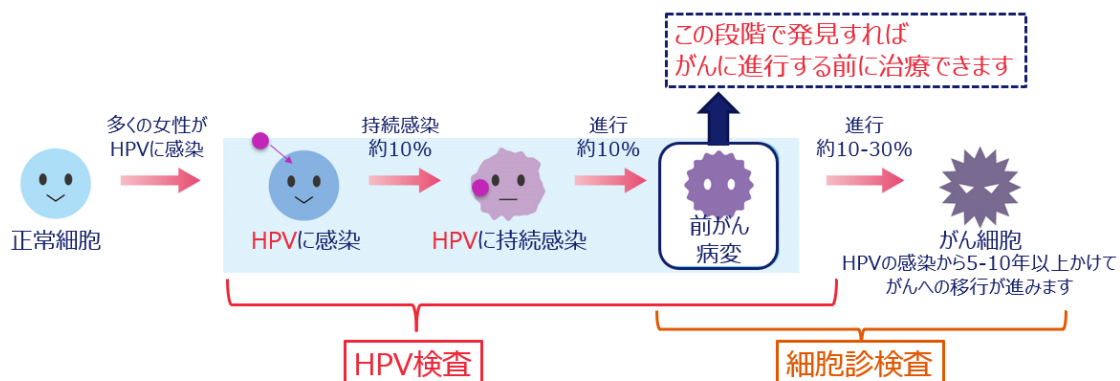


■ 日本における年代別子宮頸がん発生率



※国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」地域がん登録全国推計によるがん罹患データ(1975-2012年)より

## 子宮頸がんの発生メカニズム



子宮頸がんには前がん病変があり、検診でこれを早期に発見し適切に対応する事で予防することができる疾患です。子宮頸がん検診では、液状化細胞診と HPV 検査を併用すると、従来の細胞診単独よりも前がん病変（とくに治療が必要な高度な前がん病変）や子宮頸がんをほぼ見逃しなく検出できるといわれています。また HPV 検査は、液状化細胞診で前がん病変が見つからなくても、将来子宮頸がんになるかどうかを知るひとつの指標になります。

### 【HPV 検査の同時検査または追加検査について】

従来、細胞診検査と HPV 検査を行う場合は細胞を 2 回採取する必要がありました。本院で採用している方法では、バイアルに入った細胞で細胞診検査と HPV 検査の両方を同時に行う事ができるので、2 回採取する必要はございません。